

湯の岡の側には、上宮聖徳の皇がお立てになつた碑文があつた。其の碑文を立つた處を「伊社通波の岡」とも「射狹庭の岡」ともいふた。(伊豫国風土記逸文 万巻三十三二二)

この射狹庭の岡は、従来松山市道後温泉の南側、湯月城跡の道後公園あたりと考えられてきたが、あるいは松山市来住所で見出し小規模回廊状遺構の近くの岡のことなのかも知れない。(「朝日新聞」平成十年五月二十九日付「香明天皇の石湯行宮」参照)

射狹庭の岡から遙かに西方を望むと、田津の海に魚火をともした釣船が幾艘か点々と見えていた。

昔日の物を御覽になり、感愛の情を起し、てお製りになつた香明天皇の御製

本ーかーたら、香明天皇は、

としてあつたらうか。

せんめい
鮮明 4468 59
②

4470^P

万1-172^注 322
万1-171 来2行~

と歌をお思いたり

やかに蘇 <small>すゐ</small> つて目に見 <small>み</small> えるようです。あの日の鮮 <small>あざ</small>	か、飽田津 <small>ヒキニタツ</small> で船乗 <small>ふねのり</small> りしたあの時のことか、	さ、ののでしよう。美しく着飾 <small>きかざ</small> った大宮人 <small>おほみやびと</small>	何故 <small>なせ</small> に人になに懐 <small>なつ</small> かしく思 <small>おも</small> い起 <small>おこ</small> こ	(323) 船乗 <small>ふねのり</small> しけむ年の知らなく	反歌 <small>はんか</small> ももいきの 大宮人 <small>おほみやびと</small> の 飽田津 <small>ヒキニタツ</small> に	鳴 <small>な</small> く鳥 <small>とり</small> の 声 <small>こゑ</small> も変 <small>かわ</small> らぬ 遠 <small>とほ</small> き代 <small>よ</small> に 神 <small>かむ</small> さ	ひゆかむ 行幸 <small>りてまゝとこう</small> 處 <small>ところ</small>	(322) 伊豫 <small>いよ</small> の高嶺 <small>たかね</small> の 射狭庭 <small>いざなは</small> の 岡 <small>おか</small> に立 <small>た</small> てて	歌 <small>うた</small> 思 <small>おも</small> ひ 辞思 <small>ことおも</small> はしし 湯 <small>ゆ</small> の上 <small>うへ</small> の 樹群 <small>こむら</small>	歌 <small>うた</small> 一首 <small>いっしゆ</small> 。并 <small>ならび</small> に短歌 <small>たんか</small> から抜粋 <small>はつすい</small> して載 <small>の</small> せておこう。	三 山部宿禰赤人 <small>ヤマベノスネアカヒト 伊豫<small>いよ</small>の温泉<small>ゆ</small>に至<small>いた</small>りて作<small>つく</small>る </small>	万巻三 三二二、同三二	のかも知れない。	いになり、言葉 <small>ことば</small> をお練 <small>ね</small> りになつた	熟田津 <small>にきたつ</small> の海 <small>うみ</small> を御覽 <small>ごらん</small> になりなから、歌 <small>うた</small> をお思 <small>おも</small>	へこの射狭庭 <small>いざなは</small> の岡 <small>おか</small> の上 <small>うへ</small> にお立 <small>た</small> ちになつて、
--	--	---	---	--	--	---	---	--	--	--	--	-------------	----------	---	--	--

奈良時代初期の方葉歌人

様子

(ニ)

けんそ 2713°
山金明 172°
大文

4.471P-1/2

望月 2190
陰暦15夜の満
管弦 488
海面 203
船 2351
石植山 117
侍女 279
侍女 2968 = 18と

夜、満月が、伊豫の高嶺(伊豫の湯か
ら見て真東にある石植山かという)の上に昇
るのを待つて、船遊びする為の飾り船を熟
田津の海に漕ぎ出したのですよ(万巻一十八)
水しぶきがあかつて、女官や侍女達の間から
喚声があかつてたものでした。月の光の中に船の
そよ水は、あるいは舒明元年秋の望月の頃、
まだそんな寒い寒くなくて、船遊びが出来る
時節のことであつたのかも知れない。

「天皇と私達の来る龍舟は、甘い管弦の調
に上乗つて、月明りの海の上を、夢のように
漕ぎ進んでいったのだわ」
ふと見上げると、秋の頃の黄金色に輝く月では
ないけれど、あの時と同じような
ほほまんなまるの正月十四日の月が、峽を伊
豫の高嶺の上に昇つて、あたりを照らしてい
た。(写真因版 710 へ石植山参照)

「美しい月だ」と
齊明天皇は、過ぎし日のあんなにも心楽し
かつたあの麗しの船遊びの様子をせひ歌にし

情景
情況
4475
一巻
35行
4476

4,471^p-2/2

・カラー
・頁の上半分
左右に
はみおいて
掲載下さい



1409
290

かみ
瓶が森
558頁に
ルビ有る

1309 写真図版 710 ^{かみ} ^{かみ} 瓶が森 (1896.5m) 山頂から望む ^{えんじょう} ^{のぞ} ^{いづみ} ^{いづみ} 石榎山 (1982m)

『山溪カラー名鑑』日本の山と溪谷社、1984年11月15日(5刷)発行、562頁参照

・松山市と瓶が森との間に、四国最高峰の石榎山が有る。(第11巻)
290) 松山市の方から見ると、石榎山の稜線は、左右が逆になる。366^p-1/2

朝日新聞 (2022) 8.3日付(夕) 4面

最優秀賞「夕照・石鎚山」(松山城) 小泉次郎さん(松山市)

西日本最高峰の石鎚山を借景に、連立天守群が織りなす風景を残照の淡い光の中で見事に捉えた作品。

(岡泰行)



西日本最高峰の^{石鎚山} (1982m) 松山市小泉次郎さん撮影
朝日新聞 令和4年(2022)8月3日付(夕刊)4面
*^{ただ}但し、^{そんざい}斉明朝当時、松山城は存在^{しな}なかつた。

④4469^P

Spib 4472^P

4473^P
天つき改行

④4443^P 2/2

④4483^P -1/2

④4476^P 3/3P
④4462^P 1/2
正月(4日)

「巻1-8に記してはおかしい。」

が述べられていゝる。(万巻一八参照)

庚戌正月十四日 御船、伊豫の熟田津の

石陽の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶ほし存

れる物を御覧し、當時忽感受の情を起す。所

以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり。す

なほちこの歌は天皇(斉明天皇)の御製そ。

ただ、額田王の歌は別に四首あり

というのである。

では、この歌の作者は、斉明天皇なのであ

らうか。それとも額田王なのだろうか。

察すると、ころ、

この歌は、額田王が作ったとはいへ、斉明天皇

の御製であり、斉明天皇の御心の歌なのである

と、いう意味なのであろうか、と思われる。

* 津は「船着き場」の意である。

それにして、日熟田津は、どこにあつ

たのだろうか。

それは定かでない、これまで古三津説、山越

説、和氣・堀江説の三説があつた。(朝日新

聞、昭和六十二年四月三日付万葉の舞台参照)

か、現在、熟田津は、松山市末住町から

約八時、西方の旧小野川河口にあつたとする見方が

強くなってきた。(「朝日新聞」平成四年十

一月十二日付「春明天皇」の旅行宮参照)

●とはいえその昔、「松山市付近は入江であ

った」という。(「日本書紀」(下)日本古典文

学大系、岩波書店、三四八頁注ハ参照)

■ともあれ、日熟田津の石湯行宮 (「紀」と

記されていいるのだから、熟田津からあまり遠

くない所に石湯行宮があつたように思われる。

■大宮人達は、石湯行宮にほど近い熟田津の

入江に船を浮かべて、船遊びに興じたのだろうと推

像さ小る。

米

■もつとも、従来、一般的によく知られて

いるとおり、この歌はこう解釈されてきた。

「百済は滅んだが、百済再興を願う残存勢

力か、なお新羅を手こずらせる一方、わが国

に助けを求めた。

春明天皇は、この要請に応じ、難波から

西へ向かわれた。それは、我が国の国運をか

けたの軍事行動だった。

新羅と唐が手を結んでいいるのだから、

百済再興の意に軍事行動を起こそうとしたのだろう。

① -15° 注 16 号 故に 16 前 2 及 20 行
前 2 頁 3 行 ~
4,475^P - 1/2

sp. 4472^b

こと

百済を助けたるということは新羅ばかり
でなく、強大な唐をも敵にまゆすといふこと
に他ならず、次は我が国が攻めらるるかも知
れないのである。
出港に都合のよい朝時を待って、11月
のころと照る夜、いよいよその機会がやっ
てきた。
□ ~~いざ~~、漕ぎ出そうと
という時になり、その時額田王がこの
爽とした歌を作った。
と、いうのである。(「朝日新聞」昭和六年四月三
日へ万葉の舞台参照)
■ なるほど、心情的にはそう解釈したいが、
| 数点、疑問点がある。
□ 一つ。齊明天皇は、
△ 昔日より残れる物を御覧になり、感愛の
情を起こされ、それ故にこの歌を製って、哀傷
された。
と、いう。
● 軍船を率いて出航しよう。
と、いう歌として、この日熟田津に、
11月の歌

支那中・夜中は動かない。(月曜がある)

81-14 「月夜は」 潮時を待つとの見解もある

哀傷 4473 55行 頁 16行

4475P-2/2

4473P 29

を作ったのならば、一体どうしたわけであらうか。
 傷み衰うたしまれたのだらうか。
 ・この歌が、昔日せきじつのある一瞬いつしんの情景けいけいを鮮烈せんれつに
 思い起おぼこさせるものであったから、哀傷あいしやうされた
 のであらう、と思われ。

二つ。また安全圏あんぜんけん内にある瀬戸内海せとないかいの温泉おんせん
 地ちから、北九州きたきゅうしゅうへ向むかて行くだけのこなの
 へ、

正月十四日ころの月つき（ほぼ満月まんがつの月つき）

が照り渡る夕方ゆうがた又は日夜よるの潮時しおどきを待まちつ
 て、出航しゅつこうした。

とこののは、理解りかい難がたい。

・普通ふつうであれば、温泉おんせんの湯ゆを浴あびた後のちゆっくり
 一晚いちばんを過すし、翌日あした潮うしほのを見みて出発しゅつぱつする
 ところであらう、と思われ。

場合い

・また、敵てきの目をくらましての出陣しゅつじんなら、
 閨夜かんやを選えらぶべきだらう。

閨夜かんやを選えらぶべきだらう。

但ただし、閨夜かんやの航行かうこうは、危険きけんだ。

座礁ざせうの恐れがあるし、船ふねと船ふねとがぶつかる可能性かのうせいもある。

月夜つきよでなく

*更に、自分の船ふねが海原うなはらのどこにいたのか分からなくなるの
 ではなからうか。

コクヨ ケー-20 20x20
かき知れない
双2枚20行

出航 (第11巻) 371 前頁5行

4462 1/2 意訳に著いた日
4467 18行

20
状況 4471 1/2 終
4476 2/3 3行

印 承 明 7 年 夏 903
冷めろ 7
903'

④4462-Y2
正月4日
4.476P-1/3

※しかもすくく () 次の日の大陽が天空に () 現れるのである ()
年七月二十七日付「分葉」も塾 () 参照

※漆黒の海上へ船出する筈はない () 朝日新聞「平成十五
回三つ。 熟田津の石湯の行宮に御滞在中 ()

何等かの事情があったのだろうで
へ百濟救援軍の出撃が、のびのびに () した

よと 推察される。

●齊明七年 (六六一) 正月六日に難波から西

征の途についた当時の、

へ百濟を再興する為、寸刻を争って、北

九州を目指した

難波を出航した日か、八日後の

あの燃えるような熱気は、急速に冷めていっ

たような感を受けろ。

●齊明天皇の船が熟田津に至ったのは、齊明

七年正月十四日のことであつたが、

いかし何と、娜大津に着いたのは、二月以

上も後の三月二十五日だつたという () (紀)

*

せいしん
静観 12/17
改訂

4.476 P-2/3

④4455 P-2/2
④4456 1/2
④4462 P-2/2

なるほど 書物に記さ小ているわけをなく
 定かでないが、この物語では、次のような情
 勢を考慮してみたい。
 ■大倭国（肥後国）の舒明太上天皇（扶桑略記）の
 もとにも、逐一、大陸の方の動向が
 伝えられていたであろう。
 ① 元（晋明）元年七月十八日、義慈王が
 唐・新羅連合軍に降服して、百濟は滅亡し
 た。
 ② 同年八月、百濟の余勢の抗戦が開始さ
 された。
 ■ こうした朝鮮半島の緊迫した動向に、日本は
 どう対処したらよいのだろうか。
 ● 日本は、百濟の復興の爲に、力を与え、
 力すべきであらうか。
 ● いかんから、そうすれば、当然、唐と新羅とを
 敵にまゆすこととなる。ここのところは、た
 だ静観して、事態の推移を見守るとどめる
 べきなのかも知れない。

1759⁰ 拜謁
950⁷ 指揮云

4459^{2-3/3}
4459^{2-3/3}
俊敏 1077

4476^{P-3/3}
紀下321^{注22}
孝徳科に備定(初出)

520⁰ 危懼

149^行 次更

■ところがそん存時、齊明天皇がお遣わしになった使者が、太上天皇(舒明上皇)に拜謁を願った。

■その使者がもたらした報告によると、何と

・是歳(齊明七年)正月六日に、皇后(齊

明天皇)の軍が、難波から西征の途についた。

・皇后(齊明天皇)は、自ら新羅討伐におも

おき、軍を指揮して新羅の沙喙を攻略しよう

としておられると

という。

■舒明上皇は、その俊敏さと、勇猛さと、一に圧倒され、驚愕されたに相違ない。

■恐らく、舒明上皇は、へ本当に、心優しい皇后自身が考えた行

動なのだろうか。あるいは、中大兄・中臣鎌

足らが描いた戦略なのではなからうか

と、とまどゆれたことであらう。

■舒明上皇は、大いに危懼されたに

虞いない。

■新羅の後方を襲うのも一つの戦法ではあ

海上から

前項15行何と

東征が

自ら

374

加自

149^行 次更

コクヨ ケー20 20x20

幾度かの使者の往来

せんい え 戦 1258
せんい え 諭 896
可ぐエヨ由 4496-7431549

4.477^P-1/2

とりのえ 逗留 1582
流れて1635

存立 1324
存在 17 自在 およそ
復興 1949

はなり。ーかし、それで百済再興が成るもので
 百済を復興させるつもりならば、
 存立できるようなりてやるべきだ

そこ、舒明上皇は、伊豫の熟田津の石湯
 行宮に逗留しておられる皇后へ春明天
 皇のもとへ使いを遣わされたように推察さ
 れる。

舒明上皇は、胸中の鬼を述べ、
 へ新羅の背後に唐が控えているのだから、
 今は新羅征討を見合わせ、好機が来るま
 で待つかよいと諭されたのであろう。

ーかし、いったん新羅討伐に燃え上がった戦
 意は、そんなに容易く収まるものではない。
 太上天皇（舒明上皇）と、春明天皇・中大
 兄との間に、幾度かの使者の往来があり、
 二ヶ月間程の時が流れたの
 かも知れない。

H30(2018)11.1(木)~11.2(4回)
H31(2019)4.13(土)~4.13(3回)

4,477^P-2/2

(ニ)

けいかい
警戒 671^P

4459^P-2/3
1557

F4/13
4/3

■だが、この二ヶ月間、この時の流れが、自ずか
 ら、新羅の沙喙攻略と、いう奇襲作戦
 への戦闘意欲を失わせてしまった。の想像
 される。
 ■有明天皇・中大兄らは、ついに舒明上皇
 の助言に従い、
 へ軍船を率いて、那の大津へ向かい、
 危急の時に備え、充分な警戒を行なうこととさ
 れたのであろう。✓
 と思われ。

*

4459^P-2/3
1557

(ニ)

④4250° 凡±記 495° 2行
4465° 凡±記 493° 新行
④4476° 凡±記 497° 新行

紀下 348° 注13
4478° - 1/2

紀下 342°

④4496°

1-43
東行西走 1580°
小林 501°

百濟くだりからの使者、東行西走すとうこうせいそう

■齊明紀七年(六六一)三月二十五日奈に、

御船みふね、還りてかへ那大津なのおほつ(博多湾南岸なんかん)に至るいた

磐瀬行宮いはせのかりみやに居ます。天皇、此こゝ(那大津)を改あらた

めて、名をば長津と曰ふのたま

とある。 13.5 GM 齊明天皇の御船は、なつかしい大倭国やまとのくに(九州)

州)へと遷うつつて、那大津なのおほつに至いたつた。

齊明天皇は、那大津の磐瀬行宮いはせのかりみやに福

岡市三宅の地かという)へお入りになつた。

ナリて、この地ち(那大津)の名を改あらため

長津ながつ(那珂津なかつに好字を宛あてたものか。那珂津なかつ)

・那大津なのおほつ・那津なつ・みな同じおなとさ水た

という意味でもあつたらうか。

齊明天皇は、正月六日に難波宮なにわのみやを後

に、西へ向むかひ正月十四日に熟田津うきまのつの伊

豫よの湯ゆの宮みやに着かぬ、ここで約二ヶ月間程の

時をお過ごしになり、三月二十五日に那

リて、其の君^ヲ糺^シ解^ガを東朝^ニに祈^{マウ}すといふ。或本^{アリ}
に云^フはく、四月に、天皇、朝倉宮^ニに遷^リり居^マす

すといふ。たぶん^ニ百濟^ノの福信^ガ遣^ハわし使者^達は、

先^ニ東朝^ニ（東の大和國^ノ都^ニ）へ行^キ、

王子豊璋^{（糺解）}を迎^ムへて國^ノ主^トした

と再度^{（昨年）}（齊明六年）十月に引^キ續^クいて再^ビひ

申^ス出^タたのであろう。百濟^ノの使者^達が、那大津^{（長津）}の
盤瀬^{行宮}へ参^リ内^シたのか、それとも朝倉宮^へ
参^リ上^リて表^を上^ツたのかは定^カでない。

＊

紀下348^p 45行~

ふりきり也 紀下
古京 398^p

(26)

4,480^p

柳坂138^p 45行
3232^p 1/2 27

は精りに思はせし
りきえ
乗り切る 1753^p
4442^p 1/2

朝倉宮から
朝倉橋廣庭宮へ

齊明天皇は、もはや天皇としてこの激動の
時代を乗り切つて行く事が出来な、とお感
じになつておられたのかも知れない。

懐かしく思い起こされるのは、幼い日々を過
故郷であつたらうか。

敏達天皇の曾孫、押坂彦人大兄皇子の孫、

茅渟王の女として生まれたまはれた皇極・齊明

天皇は、一たび大倭国(肥後国)におい
て幼少の頃をお過ごしになり、長じて舒明天皇

の皇后となられたのであろう。

娜大津(長津)からは南の古京が目と鼻の先

が出来が、心はやるままに、舒明上皇がおいで
になる南の方へとお急ぎになつたのであろう。

齊明紀七年(六六一)四月条に、

或本に云はく、四月 天皇、朝倉宮に

遷り居ますといふ

とある。

コニトイフ朝倉宮は、筑前国朝倉郡に

あつたようである。朝倉宮跡は、福岡県朝

倉郡朝倉町山田といひ、一説に同郡宮野村須

川（山田の西北隣）といひ。

なお、娜大津（長津）の磐瀬行宮から遙か

に遠い南の筑紫平野へ移られたのは、敵襲を顧

慮したためか、という。（日本書紀）（日本

古典文学大系、岩波書店、三四九頁注一七）

羅の連合軍に立ち向う以前の段階で、天皇が

早々と南の奥深くへ引き込んでまわされた、

というの領けない

・止めて、「大宰府」あたり陣を張ったと

いうのなら解らなれどもないか、内陸部

の朝倉に居て、

へこれから刻々と変わらう朝鮮半島の

動きを、的確に把握する

のは、困難だらう

*

4485-1/2 宮址

■ ところどころ、日本書紀には、お
かしなことが記載されていいる。

■ 齊明紀七年(六六一)条を見ると、

□ 或本に云はく、四月に、天皇、朝倉宮に

遷り居ますと云はく、

と述べた直後に、引き続き、

□ 五月九日に、天皇、朝倉橋廣庭宮に遷り

て居ます。云々

とある。

■ なるほど、前者には「或本に云はく、云々

とあるのだから、

お遷りになったのは、四月に、

それとも五月九日のことだったのか、正確に

は分からない、というふうにも受け取れる。

■ かし、大昔の出来事とならぬが知らず、

齊明天皇の動向が人なまでも曖昧模糊とし

たものであったとは考えにくい。

■ 表向き生真面目そうに、

へどちらが正しいのか詳らかでないから、両説

を載せておく

といった風をよそおってはいらるか、しかし

は、その裏に何かが隠されているのであろう。

へ、後代の読者の思考を下筑紫の朝倉

宮に留めおきたいと熟慮工夫されたものな

のであろうと思われる。

すなわち、四月条の朝倉宮と、五月九日

条の朝倉橋廣庭宮とは、類似の名を持つ

宮だとはいえず、全く別の宮なのではな

らうかと、想像さ小る。

米

ここに思ひ出さ小るのは、雄略天皇の泊

瀬朝倉宮である。(紀)

なお、古事記には長谷朝倉宮とある。

雄略天皇の泊瀬朝倉宮は、三輪山

の南の切欠部(阿蘇)外輪山の切欠部に相当

する所を流れる泊瀬川のほとりへ

へ大和国城上郡磐坂谷の岩坂と黒崎

という二村の間に在った

い、大和志に、この宮址は十市郡の安部長門
 邑（今、桜井市阿倍。泊瀬川の南、丘陵地の
 山際）にあつた、と述べらうしてゐる。

② 欽明天皇の磯城郡の磯城真金刺宮は、今の
 奈良県桜井市金屋（泊瀬川北岸）の東南、泊
 瀬川のほとりにあつたらう、といわれてゐる。

しかし、すでに述べたように、用明天皇も欽
 明天皇も、大和国に都さされたのではな
 く、大倭国（肥後国）に都を定められたので
 あらう、と推察される。（第一表参照）

もしかゝたら、
 へ用明天皇も欽明天皇も、大和国の朝倉
 口桜井にあたり地形的に近似したところ、
 白川の兩岸にそそり立つ崖が開けたあたりの
 南側に都を置いて、政治を行なわれた
 のかも知れない。

■ いうまでもなく定かでないが、この物語
 には、
 へ、
 切り立つた谷が開けるあたりの地、岩坂付近

小井
241
シ
44819
宮跡
小井
938
シ

「この」かや

4,485^P-2/2

きやうにしろえん
急持 557^P
命名 2166

一、急ごしらえながら新あたしい宮みやをお作つくりにな
 り、~~この宮殿へお遷り~~ トシノミヤノマシヘ 朝倉橋廣庭宮あさくらばしひろのうらと命名めいめいされ、
 この宮殿へお遷りうつになったのたであうう✓
 と考えてみたい。

*

新古今 505P
5816 4486

たいほうえ
耐乏 1384
4,486P

木殿紀下349
④ 経内
二は 元 798
御所

きゆうぞう
急造 元 559P
急いて作ること

木の丸殿

するわけにはいかなかったのであろう

■ 恐らく、タクマが原の且小墾田宮こほりだのみやを都と

するには、かなり大規模な手直しが必要だっ

たのであろう。
『小墾田宮』を御所とは

・ ~~とはいえ~~ 齊明天皇は、~~その~~よろなとは

なさらなかつた。

■ 齊明天皇の御座所として作られた ~~如~~の急造の

朝倉橘廣庭宮あさくらたちばなのひろにわのみやは、皮かわもはがな

造りであつたという。

■ そこで、この宮は別名「木の丸殿」とも呼

ばれた。

・ 飛鳥の「板蓋宮」(皇極二年四月二十八日

条)と「木の丸殿」といい、皇極

(齊明)天皇は自ら進んで耐乏の生活をされた

て、民の負担を軽くしようとした

のであろう、と拝察される。

■ ときに、中大兄は、この「木の丸殿」

におりて次の句神楽歌かぐらうたをお作りになった。

朝倉や木の丸殿に我が居れば

我が居れば名宣りをもつ

行くは誰

元宣る

45.8.1(日)⑥

新古今 505頁 4.487P

新古今 505P

うたの
誦物 1657
名対面

(こと)

名宣リは宿直に出仕した役人が氏名を
 名のつて通ることであり、名対面の際の情景
 を歌ったものである。

「朝倉」木の丸殿などの語感が鮮やか
 で、爽やかな誦物となっており、

この歌に、母脊明天皇の死を予測させるよう
 な暗さなど、微塵もな

新古今集四一六八七には、天智天
 皇御歌として短歌の形で出てくる。

新聞昭和五十八年五月十日付八折々のうた

大岡信、参照

朝倉や木の丸殿に 水をは

名のりをしつつ ゆくはたが子ぞ

とある。新古今集に「水をは」とある。
 ・子は「愛称であり男女を問わぬ人を親

しんで呼ぶ語である」という。「新古今和
 歌集」日本古典文学全集「一九八九年三月一

日「第一七刷発行」五〇五頁「注四」「広辞
 苑」へ子（参照）

*

(こと)

あらい 紀上472⁰ 4490^{0-2/2} 177

元禄315⁷ 凡±R449⁰ - 4.488^P

あらい

小林 253

宇治下202^P 紀下349^{注19}

鬼火

■ そんな時、恐ろしいことが起った。
出来事があった。

■ あらいは、朝倉社（朝倉宮背後の山かとい

う）の木を切り除って此の宮を作ったからで

あろうか、神念りて殿を壊し、亦、宮

の中うちに鬼火おにびが見あらはれたのだった。

● 神念かみいかりておぼこのまにほつまたみやのうちに壊殿おぼとの亦見また宮中鬼火おにびあらはれぬ

とらう。（香明紀七年五月九日条）

■ 鬼火おにびは、火山などで、硫黄りゅうおうの燃もえる

炎ほのおのことを意味する。→ 広辞苑

ハ鬼火おにび参照

● 尚、伊豆国風土記逸文いづのくにふうどきいつぶんハ温泉おんせん条じょうには

山岸やまがしの窟いほの中に火焰くわん降りおりて温泉おんせんを

出いし、甚いたくお燃も烈れつる

とある。

■ あらいは、阿蘇あその神かみ（三諸岳さんしよがくの神かみ、菟田うだの

墨坂神すみさかのかみ）か、碓すい碓すいき、目精まなこ赫赫かかかせて、噴火ふんか

たのであろうか。（雄略紀七年七月三日条）

照

つまり、阿蘇の噴火に伴って起こった地震が

朝倉橋廣庭宮を壊し、亦、真赤な火山弾

が宮の内に降り注いだのかも知れない。

そして、鬮の中に一際鮮やかに噴き上がった火

柱は、あたりを真紅に染めあげ、宮の柱や壁

などの全てを、鬼火のように彩った。その

なかろうか。

是に由りて、大舍人および多くの近侍の

者、病んで死ぬ者が多かった。

という。(紀)

ただし、陰暦五月は梅雨明けで、雷の多い季

節であるから、

へ雷神が念り、殿を壊したのであろう。

とする見解もある。(「日本書紀」(下)日本古

典文学大系、岩波書店、三四九頁注二。参照)

*

468
-661
紀下369
4.490^P - 1/2

重本をよおす記事多
新ヤ(1) 419^P F1行

紀下350^P

齊明天皇崩

齊明紀七年(六六一)六月条には、

伊勢王薨

伊勢王薨せぬ

とある。

なるほど

明らかか、どうみても伊勢王が薨
じたように見受けられるが、

伊勢王は、この時、うき世を捨てて出家

と解

予め述べると、七年後の天智紀七年(六六

ハ)六月条に

伊勢王と其の弟王と、日接りて薨せぬ。

未だ官位を詳にせず

とある。

伊勢王

日本書紀には、伊勢王薨去

推察するところ、

記載し功返16行

元1066

お3冊 4.488 18冊

前12冊

4.490^P-2/2

ひんわん がおん 1190
頻出190 杜撰
重出に事(4665)

(2)

日本書紀の編纂者達は、
 智兩朝の七年六月のことだから、
 かり厩違えてしまつた」とりうこと
 あえて、重出記事（重出記事）をよそおつたのであろう
 と思われぬ。

なお、齊明紀の次の天智紀には、
 杜撰極まりなり、
 重出（重出）を思わせり記事が頻出する
 （第一巻末尾の年表、六五九年の下段参照）

前者の齊明紀七年六月条に「伊勢王薨」
 という記事は、
 伊勢王が、このとき出家した
 と解釈すべきであらう、と思われぬ。
 王の出家のことに、
 官位も詳らかにできな
 国史に記載してゐるの
 は、それなりの理由があつたに違
 ない。

あるいは、
 齊明天皇が退位を決意されたので、
 伊勢王は出家して熱い心情を示したの
 かも知れぬ。
 齊明天皇の出家得度の御意志が

120

(2)

紀下350^{頁7} 天智7年 668 68^才
「重出」
一 神代 661 61
7 7

4688^P

4.491^P - 1/2

5338^P
4688^P

「うせん
偶然」 613^P
紀下350^才 前2頁4^才

強かつたので、伊勢王もとちに出家の道を選
人だのであらうか。
もつとも、いうまでもなく、確かあるすや
ない。なにかならぬことである。
先述の「伊勢王薨」と
いう記事に引き続いて、その翌月の齊明紀七
年（六六一）七月二十四日条には
天皇、朝倉宮に崩りまゝぬ
とある。
齊明天皇の享年についで、帝王編年記は、
六十一と「いう。
「かし、もしかしにらう、まったくの偶然が
重なったのであろうか、
へ齊明天皇は、齊明七年（六六一）七月二
十四日に退位され、七年後の天智七年
（六六八）七月頃に薨去された。
のかも知れない。
紹運録・水鏡などによると、齊明天皇の享
年は六十一と六十八であったという。
ここに、七年後の天智紀七年（六六八）七
月条を見ると、唐突にも、
時の人が

H9.3.9 (日)
H5.8.2 (月) ㊦

4491^P - 3/2

天明紀年661年; 天智紀年 668年 前

㊦ 4688^P

㊦

紀下370^P 25行
#下276^P #68行

㊦ 天皇の天命は終らうとーているのたろう
か

と言った、と記さ水ている。(後述)

㊦ 天智天皇がそくなられるのは、あつと後の

ことであり、普通に考えればこの記事にど人

な要因するところかあるのか理解にくく

㊦ あえて述べるに、天智紀にいう日天皇は、天

智天皇で、ふとでなく、有明天皇(上皇)

のことで、たろうと思われる。(後述) 卷末の

△保寿表△参照

*

④ 426P 7行「お暖水」
 ④ 4490P 7年後の天智7年 68才前か 4492P

天智14 668年
 7 661年

紀F579P 紀F57頁

また、家伝には、
 〔齊明〕天皇崩于朝倉行宮、皇太子素服
 称制、...、天皇喪至、自朝倉宮、殯于飛鳥川原
 十四年皇太子攝政ス
 と見える。(7日本書紀L(F)日本古典文学大
 系、岩波書店、五七九頁補注二七一—参照)
 ・なお、齊明十四年は、天智称制七年(六六
 八)に当る。(第一巻末尾の年表、六六七年、
 六六八年(参照))
 うまり、齊明紀七年(六六一)七月二十
 四日条に、
 〔齊明〕天皇、朝倉宮に崩りまゝぬ
 と記述されておるとはいえ、齊明上皇は、
 この後も長らく御存命だったのであろうと思
 われる。(七年後まで)
 存お、この文中の「十四年皇太子攝政ス」
 要検討。

藤氏

喪
 持統紀「新羅に於けて、天皇の喪をすべし
 瀬行のまじりとすべし

下496P
 6行

正白地の禊服
 喪服

天智即位紀 第496P
 天智即位紀 第496P 9へ
 天智即位紀 第496P 7月24日

大笠を着た鬼

齊明紀七年(六六一)八月一日祭に

皇太子、天皇の喪を奉徒りて、還りて磐

瀨宮に至る。是の夕に、朝倉山の上に、鬼有

りて、大笠を着て、喪の儀を臨み視る。衆皆

嗟怪ふとある。

次のように解してみたい。

皇太子(中大兄)は、齊明天皇の喪をつとめ

北の、朝倉標廣庭宮の東の山に神の朝の坐

夕方に、朝倉標廣庭宮の東の山に神の朝の坐

火柱と黒い煙を天高く噴き上げた。

大津の磐瀨宮から見ると、ほぼ南の方角に

真赤な火柱が立ち、黒い噴煙が火柱の上一面

を覆っており、まるで、赤鬼が、大笠を

着て喪の儀を臨み視ているかのようにであった。

コゾ 7-20 20x20

鬼が北の方を見た 4495P

聚落=京都 1072

4.494^P

いかづち 95
じやく 1072

1927/2/3
4420-7/3

「かみこと」昔は「カムコト」神代記上

人々は皆、それを怪しんだ

たひたひ引用したとあり、朝倉山について、

皇太神宮（伊勢神宮の内宮）年中行事の

神事歌に、

朝座に鳴る雷も降りまじませ

という神招きがあり、一般に聚落の東方にあ

って目立つ山は神の朝の座とさ小たらしい

という。（「日本書紀」）（「日本古典文学大系

岩波書店、三五〇頁注九参照）

伊勢神宮内宮の発祥の

所と云うべき大倭国（肥後国）の天照大神

の宮の東方に、ひととき高く聳える阿蘇山の

外輪山を

へ往古の人々は、神の朝の座とみな

し、朝倉山と呼んでいた

のかも知れない。

その人なわけで、聚落（京都）つまり香明天

皇の朝倉橋廣庭宮（東の高峰）阿蘇山の外

輪山を「朝倉山」と記述したのであ

らうと推察される。

阿蘇外輪山の外側から見ると、外輪山の上に火柱

黒煙が見えたのだらう。

49.39(日) 4
 H11.11.6(土)
 H29(2017)3.24~3.31
 H30(2018)11.2~11.3(4回)
 H31(2019)4.13(2回)
 令和元(2019)9.26(4回)
 令和2年(2020)5.31日(5回)

前漢 揚雄 元2273
 大カン7 2518 128
 4495P

4.495P

家鬼
 1091P

紀下349注19 朝倉は前國
 高学地図 20

日本書紀を読む者に、
 へこの日朝倉山は、阿蘇山のことであ
 る。と悟らせるわけにはいかな
 どのうであつても、
 前漢の揚雄(儒者・哲学者)の文の、
 朝倉山と称してゐる。と信じ込ませる必要があつたように解さ
 ぬ。なお、鬼瞰の禍と云う言葉がある。
 高明の家鬼、其の室を瞰うし
 から出たものである。
 鬼瞰の禍とは下
 鬼神は、高明(富貴)の家の幸せをにく
 んで、その室をうかがひわざわりする
 という意味で、富貴の家になぜぬいのおこる
 ことをいう。(「故事名言辞典」折井英治、集
 英社、一三六頁参照)
 二年後の大きな禍(白村江の惨敗)を暗示
 する為

鬼が、北の方を臨み視た
 たようにも思ひぬる。

(2)

(2)